

# イワシの頭も信心から

## 二の黒高志

目の前を黒い猫が通り過ぎた。

昼休みの後の最も耐えがたい講義が終わり、世界がオレンジ色に変わり始める頃。この時間になると人通りが少なくなってくる校舎の影。僕が腕時計から目を上げると、そこに黒猫はいた。濡れ羽色よりも深く澄んだ黒色だった。その猫はふと足を止め、2秒ほど僕を見据えてから何事もなかったように通り過ぎて行った。四本足で歩きながら輪郭をぼんやりとさせていき、少しずつ景色と同化して消えた。

「君、何をぼうつとしているの？」

後ろから声をかけられ、振り向く。そこには先輩

の和泉さんが呆れ顔で立っていた。

「人通りが少ない場所とはいえ、道の真ん中に突っ立てると、さすがに邪魔なのよね」

普段通りのわざとらしい辛辣な言葉。和泉さんは同じ学部先輩で、確か民俗学を専攻していたはずだ。女性にしては短めの茶髪、ヒールを履かなくても十分な背の高さ、整った顔立ち。よく僕を振り回す先輩の一人であり、僕の大学生活のプラス要因でもマイナス要因でもある。

「いえ、今さっき黒猫が通りかかって。あまりにも綺麗だったので、少し見とれていたんです」

すると和泉さんはその白い頬をひきつらせた。

「……君、あまりに現実の女の子にもてないからって、猫まで守備範囲に入れたのか。恐ろしい奴なのね」

「ちよつと待ってください。誤解を招く発言はやめてくれませんかっ」

僕はあわてて否定する。さすがの僕でも猫にまで発情したりしない。

「それよりも……黒猫ね。君はこの学校で黒猫に逢うことが、どういう意味か分かっているの？」

先輩は表情を曇らせる。僕がこの大学に通いだして半年が過ぎていた。これまでの間にいろいろな人とも話をし、この先輩にいろいろと振り回され、いやというほどの経験をしてきた。だから僕にも思い当たる節はある。

「まあ、一応は。『この学校で、黒い猫が目の前を横切ると、その人は不幸になる』という話ですよね」

僕は世間話をするつもりで話した。和泉さんはそ

れを聞くとおもむろに僕に近づいてくる。

「君は半年も私に付きまといていて、その程度の認識なの？ 嘆かわしいわ。それなら改めなければいけないわね。今すぐ私についてきて」

いつものごとく自分勝手な先輩だ。そもそも付きまとったのではなく連れまわされたという点で誤解がある。それに、僕にだって都合とか予定がある。

「でも先輩、僕はまだ授業が残っているのですが」「知らない」

そういつて先輩は僕の腕をつかみ、そのまま引きずって行った。相変わらず勝手すぎるだろ。

着いた先は第二食堂だった。ここはいわゆる学生食堂とは違ってカフェテリアといった趣がある。だからメニューもそれなりの値段で展開している。和泉さんは僕の向かいに座り、教育料として僕におご

らせたコーヒーを飲んでいた。ぼくは水である。たしかに比較的静かな場所であるために、ワイワイ騒ぐことが目的ではない僕たちにとっては都合の良い場所ではあるのだが。

「この学校で黒猫に逢うことは、そんなに簡単に済ませていい話じゃないの」

和泉先輩は切り出した。僕は先輩の形の良い胸から目をそらし、薄紅色の唇に目をやって聞いた。

「昔、学生闘争のあったあの時分。この大学のとある教授が、自分の研究室で猫を飼っていたらしいわ。それはきれいな黒猫だったそうよ。その猫は校舎内を徘徊し、当時の学内ではアイドル的な存在だった。けれど不幸なことに、一部の心無い学生に散々に虐待され、挙句死んでしまった。当時の学長はその犯人たちに退学などの重い処分を下し、猫の霊を供養。飼い主だった教授も齢だったのか、引退。それでこの話は悲しい結末とともに終わるはずだった」

先輩はふと目を落とした。カップの中をゆつくりとスプーンでかき混ぜている。この先輩は一つ一つの動作が洗練されていて、ほんの小さな動きだけでも人の目を惹いてしまう。

「はずだった、というのとは？」

僕の問いかけに、先輩はニヤリとする。よくぞ聞いてくれた、と。先輩は目を僕に向けなおして続けた。

「けれど、その後も学内で黒猫を見かけたという人がたびたび現れた。おかしい話だよね、教授の飼っていた黒猫は死んでしまったというのに」

「見間違いでは？ 別の黒い猫がまぎれこんでいただけとか？」

僕は当然の疑問を投げかける。

「話を聞いた人たちも当然、そのことを思っただろうね。けれど、当時の人たちは『間違いない』と言ったの。『あの黒猫を見間違えるわけない』とね」  
「それ、なんだか変な話ですね。でもそれがさっき

話とどうつながってくるんですか？」

僕は少し身を乗り出した。この話が面白くなってきたのはもちろん、先輩の話し方、呼吸の間、そういったものにひきつけられてもいた。まあ、こうやっていつも騙されているはずだけだね。

「まあ、そう話を急かさないでよ。……そう、見かけただけでは終わらなかった。見かけた人たちが次々と不幸な目にあうようになったの。大きなことから小さなことまで、さまざまな不幸が彼らに襲いかかった」

「先輩、たとえばどんなことが起こったんですか？」  
なんだかいやな予感がしてきた。それなら僕はどうなってしまうのか。

「たとえば、そうね……。私が聞いた話だと……」  
先輩は目が笑っていない。

「財布を失くす、レポートを紛失する、家の鍵を失くす単位を落とすエトセトラエトセトラ」

僕は少し拍子抜けした。

「……その程度ですか？」

「甘い、甘いよ。交通事故、落雷、放火に一家離散。自殺、ビルの崩壊、エレベーターの落下。入院はもちろん人によっては命に関わることも」

少し背筋が凍った。単に死んだはずの幽霊猫にあっただけでそんな目にあってはたまらない。

「先輩、そんなのつてただの迷信じゃないですか？  
信憑性も低いですし。必ず不幸になるって話じゃないんでしょう？」

よくわかったね、と言いたげにうなずく先輩。

「そ、黒猫を見た人の全員が不幸な目にあったわけじゃない。なぜだかわかる？」

「それは……わかりません。先輩の口からお願いします」

予想もつかないわけじゃない。けれど先輩が目を爛々と輝かせ、話したくてうずうずしている様子を

見ていると、正解を言っではいけないような気がしてしまった。

「まったく、そんなこともわからないの？」

先輩は少し嬉しそうだ。

「なら教えてあげる。黒猫が死んだ直後だったらそれがどんな猫だったのか、多くの人が知っていただろうし、見間違えるわけではない。そう、当時その猫を見たことのある人たちなら。だけどいくら有名とはいえ、たかが猫一匹。学内全員がその猫を見たことある、なんてあるはずない。ましてや直接見たことのない人たちなら、噂くらい聞いていれば、学校の敷地内であった猫を『あの有名な猫だ。間違いない』と結びつけてしまうこともあるでしょう。だから何人かは紛れ込んだ黒い野良猫を見間違えていたはず。そしてその猫がいたのはもう何十年も前の話よ？ 今となつては当時のその黒猫を見たことある人間なんて、この大学にいるはずないじゃない。

だから単に黒い猫を見ただけで、大騒ぎするような輩も大勢いるってことなのよ。そして重要なのはこれ、幽霊黒猫を見なかったからと言って、不幸にならなかった、とは限らないということ」

そこで先輩は一息ついて、すっかり冷めたコーヒを一気に飲み干した。

「わかる？ 幸や不幸なんかね、その人の心持ち次第でいくらでも流転するのよ！ 災い転じて福となす、とも言うでしょ？ イワシの頭も信心からって言うけど、そんなつまらないことをさぞ大げさに言い伝えて、自分の失敗や不注意、不幸を幽霊猫のせいにするしかないなんてかわいそうもいいところよ！」

途中から完全に迷信を否定しにかかった先輩。いったいなんなのだ。

「先輩は、その、幽霊黒猫の噂話を信じているんですか？」

先輩は身を乗り出して、僕のグラスをひったくり、中の氷まで飲み干した。目は僕に据えたまま、唇を手の甲で拭った。

「いいえ、ほとんど信じてないわ。不幸な目にあった人、それこそ入院までしてるような人たちには、黒猫を見たと言ってる人たちもそれなりにいるのは確かなんだけれどね」

さあてね、と先輩は頭を振った。

「実際にその幽霊黒猫は、出会った人を不幸にすることができのかもしれない。けれど、私はその猫をまだ見たことがないし、あなたが見たという黒猫がその幽霊なのかもわからない。だからいるかどうかも分からないし、信じていないとしか言えないわ」僕は生唾を飲み込んだ。確かに幽霊黒猫の話はただの噂話で、たいしたことはないのかもしれない。けれど、普段ならそんなことが起きるなんて意識もしないし、警戒だってほとんど無意識なはずなのだ。

大きな不幸が訪れるかもしれないという不安は、確実に僕を圧迫していた。

「まあいいわ。これであなたにどんな不幸なことが起こるのか、それを見て確かめて、きっと論文にまとめ上げてみせるわ！」

僕には先輩が何を言ってるのかわからなかった。論文？

「先輩、論文ってどういうことですか？」

しまった、と言わんばかり変化した先輩の表情。

「だって先輩はそんな迷信は信じてないんでしょ？ それなのに先ほどから僕の不安を煽ったり、それでいて僕を励ましているみたいだったり。どういうつもりなんですか？」

勢いでついしゃべりすぎたらしく、先輩は一気にまくしたてた。

「ち、違うのよ？ 私は単に話をしておくの也需要かなあと思っただけで、別に『身近な伝承と心理』

というテーマで民俗学の論文を作成しよう、なんて考えているわけではないの！ そのあたりを勘違いされては困るのよ！」

僕は生ぬるい視線で先輩をにらんだ。この人はクールなお姉さんらしく振舞うことを忘れ、頬を赤く染めていた。

「つまり、僕を論文のネタにするためにわざわざ捕まえて、長話に付き合わせたんですか。裏ではそんなことを考えていたんですね」

「私は裏表のない素敵な人よ？」

「自分で言ったら世話ないです」

わざとらしく目をそらす先輩に、僕は大きくため息をついた。

「まったく、他人の不幸は蜜の味、とは言いますけどね。あなたという女性はホントに迷惑な人ですね」

「ホントは私と一緒にいられて嬉しかったくせに

……」

危うくなつた形勢を逆転すべく、普段以上に僕をからかおうとする先輩。でも先ほどの余韻が残っているのか、顔は赤いままだ。

「ちよつといい加減にしてください」

普段の力関係では到底できないような強い態度をとると、先輩は途端にしゅんと小さくなった。可愛いから許しますけどね。

「それで、僕はこれからどうすればいいんですか？」

すると先輩は目を大きく見開き、瞳を輝かせ、元氣を取り戻した。表情がころころ変わるので、正直、見ているだけでも飽きない。

「存分に不幸な目にあってくれればいいわ。水難、火難、挙句に女難。あなたがどれだけ苦しんでくれるかどうかで、この迷信が正しいのか妄言なのかがわかると思うの。そうすれば私の論文が完成し、あの禿げた教授にぎゃふんと言わせることができる

わ！」

「女難の相ならずでに出ているんですがね」

「そんなことないわ。私のような親切で美人な先輩が近くにいるというだけであなたは幸せの一端を手に行っているの」

そんなわけあるか、と内心で毒づく。

「それじゃあね。思う存分不幸になりなさい、私のために」

それだけ言うと和泉先輩は席を立ち、僕に背を向けて優雅に去っていく。僕は彼女の背中や髪の影響から見える首筋を眺めてから頭を抱えた。

すると、僕の目線の先、足元のあたりを「ざまあみろ」とでも言いたげに、黒猫が優雅に歩いて行った。歩いて行って、霞となって消えた。

和泉先輩は今日も元気だ。